

南九州における

横瀬古墳群の特殊性

一、はじめに

鹿児島県には現在のところ二十か所の前方後円墳が知られている（第2表）。この中でもつとも整然とし、美しい景観を見せているのが曾於郡大崎町横瀬えさいに所在する横瀬古墳^{（横瀬）}である。

昭和十八年九月八日に国の史跡として指定された本墳は、以下に記すように南九州では異質の古墳でありながら、石室内からの出土品が行方不明となり、埴輪等も各所に散在したために、これまでこれをまとめたものはなかった。昨年三月、当館は故寺師見国先生の収集資料を寄託資料として預かったが、この中にも横瀬古墳採集の埴輪等が若干含まれていた。埴輪の中には各種の形象埴輪が含まれており、その内容には、注目されるものが少なくない。そこで、これまで散逸していた資料の図化を図るとともに、横瀬古墳の内容を検討してみたのが本稿である。

この稿を成すについては各地で多くの機関、人々のお世話になった。以下にその芳名を記し、心から感謝の意を表したい。

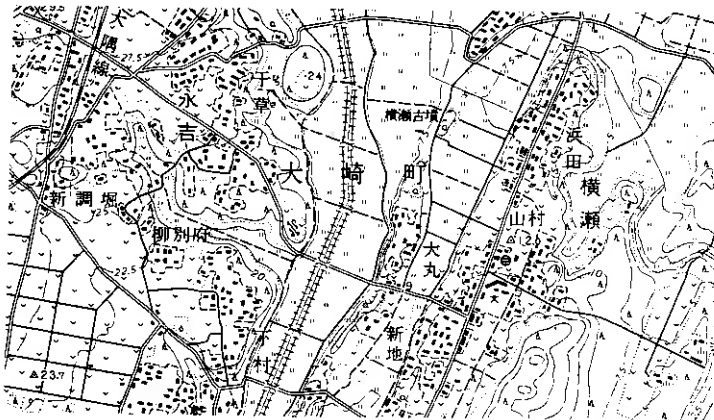
宮崎県立博物館、鹿児島県教委文化課、大崎町教委社会教育課、川内市歴史資料館、志布志高校、新田神社、森元盛一氏、豊留高尚氏、後追哲矢氏、石川悦雄氏、日高孝治氏、岩永哲夫氏、中島哲郎氏、長谷川順一氏、中村耕治氏、北郷泰道氏

二、研究史

横瀬古墳がはじめて文献に出てくるのは、文政七年（一八二四）に出された『大崎名勝誌』であろう。「山上太き石棺有之候得共年號月日書記無之何故某之墓と相知不申候古き焼物瓦類今に崩出候」とある。

次いで天保十四年（一八四三）に出された『三國名勝図会全60巻』でも「巻之59大崎」の項に「大家山、地頭館より己方、十九町餘」という見出しで、

池畑耕一

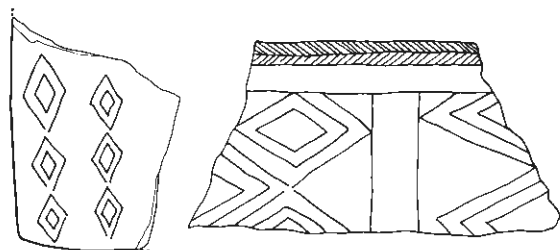


第1図 横瀬古墳の位置

「横瀬村にあり、周廻三丁許の林叢なり、往古戦場ならんと云へども、事跡傳はらず、山上に大なる石棺あり、年月姓名を記さず、古陶器の類、今に崩れ出ることあり。」と記してある。

さらに明治四年（一八七二）に編された『薩隅日地理纂考 全』の「二十七之巻日向国諸縣郡大崎郷」の項にも「大冢山」という見出しで、表現が若干違つて同じような内容を記してあり、明治十七年の『日向地誌』も同様に記してある。

大正五年（一九一六）八月五日発行の『考古学雑誌』第六卷第十二号に瀬之口傳九郎は「大隅国大崎村瓢形古墳及び其埴物に就て」という小論文を記して、ここで初めてこれが前方後円墳であるとしている。それによると「前方部の径は、約三十二間、クビレ部径約二十八間、後圓部径約四十間、而して縦径は、実に六十間に達する、後圓部の高さは八間程で、前方部は無論これより低い、後圓部は、今少し高かつた者と見られるが以前に発掘されて、頂上方数間の平地をなし、石槨の露出がある」「墳は陪塚を持たぬ又埴がない、併し、前方部より十数間を隔てて、高さは一問程の、臺をなして居るのを見ると、この間が、埴址らしく覚ゆるのである」「石槨は後圓部の頂上に其葺石を露はして、縦横であるが、規模は割合に小なり」と記して、次に三点の埴



第2図 瀬之口報告の埴輪（考雑6-12より）

輪片を紹介している。うち一点は第七図26の円筒埴輪である。他の二点のうち的一点（第2図左）は円筒埴輪の基部で縦長の菱形文六個が彫り込まれている。あとの一点（第2図右）は盾か、きぬがさのようであるが表面に横長の菱形文様のみられ、上端付近に綾杉文（やまぎ）がみえる。上辺長が三寸一分、下辺長が四寸八分、右側辺長が二寸九分あり、厚さは四分位しかなく板状を呈しているという。

大正十二年一月五日発行の『考古学雑誌』第十三卷第五号に瀬之口は再び「大隅に於ける古墳の分布及び其概観」という題で南隅各地の古墳を紹介しているが、ここでも横瀬古墳について書いてある。先には前方部幅を三十二間としたが、これでは三十六間とし、他にもくびれ部二十一間、後円部径三十六間、後円部高さ六間と修正している。方向は南五度東で、埴輪円筒は少なくとも二重に巡るとしている。さらに「地主に依れば、此外開墾の際、土馬土鳥等を出し、之を一所に埋めし由なるが、今其所在を失せり。尚古墳の附近には、尚ほ幾多の古墳を、有したるものなるべく、古老の言に依れば、墳の周囲に数個の小墳ありし由なれど、今田地となれり。」と記し、動物埴輪の出土、陪塚の存在を示唆している。

大正十五年、山崎五十磨は『史蹟名勝天然紀念物調査報告』第一輯（鹿児島県）に大崎村横瀬字えさい町所在の横瀬古墳（大塚山と称す）として紹介している。ここで初めて古墳名として横瀬古墳の名が付けられた。瀬之口のもの踏襲しているが、その数値が若干異なる。なお、「現今墳の周囲には陪塚はなけれど土地の古老の言に依れば往古は数多の小丘（古墳？）が田圃の中に点在し往年耕地整備の際に総て破壊したりと云ふ今一箇所東南約三十余間の所に遺存するも果して之れが陪塚なるや否

やは其原形を失するを以て今日塚と断すること能はず」とあってここでも陪塚の存在を記している。副葬品については、石室の蓋石が三寸位あっていたため明治二十四・二十五年頃、大崎町の薬種商が境内および棺内から副葬品を持ち出したが、後日たたりを恐れて元のように戻したと伝えられている。がそれが事実かどうかはつきりしないとしている。そして「今に副葬品として玉類刀剣、鏡鑑等を出したるを聞かず」とあり、全形、石室の露出部、円筒埴輪（五点）の写真が掲載してある。

昭和六年に松下重資の記した『鹿児島縣郷土史大系』第二巻古代史にも瓢形古墳（大冢山）として先に記された記事と似たようなことが紹介されている。

昭和十年、木村幹夫は『考古学雑誌』第二十五巻第五号に「大隅に於ける前方後圓墳に就て」を書き、横瀬古墳など六墳を紹介しているが、ここでは遑躰らしきものは殆んど認め難いとしている。そして、この六墳の中でもっとも整美に近く、古く位置づけているが、それでも宮崎県のものとは比べても墮落的形式を認めるとして新しく位置づけた。

昭和十四年の『鹿児島縣史』第一巻でも山崎報文（大正十五年）をまとめた紹介がされ、全形と円筒埴輪（山崎報文と同じ）の写真が載っている。

昭和二十六年に救仁郷断二は『大崎町史』を著し、「横瀬大塚古墳」の名で概要を紹介している。規模の中で高さはいっしょだが、全長を八十五間としている。明治二十年までは埴輪片が無数にあったが、今は皆無であるとして、埴輪の中には円筒の他に人面などもまざっていたとしている。また盗掘された年を明治三十五年として盗掘者から直接聞いた

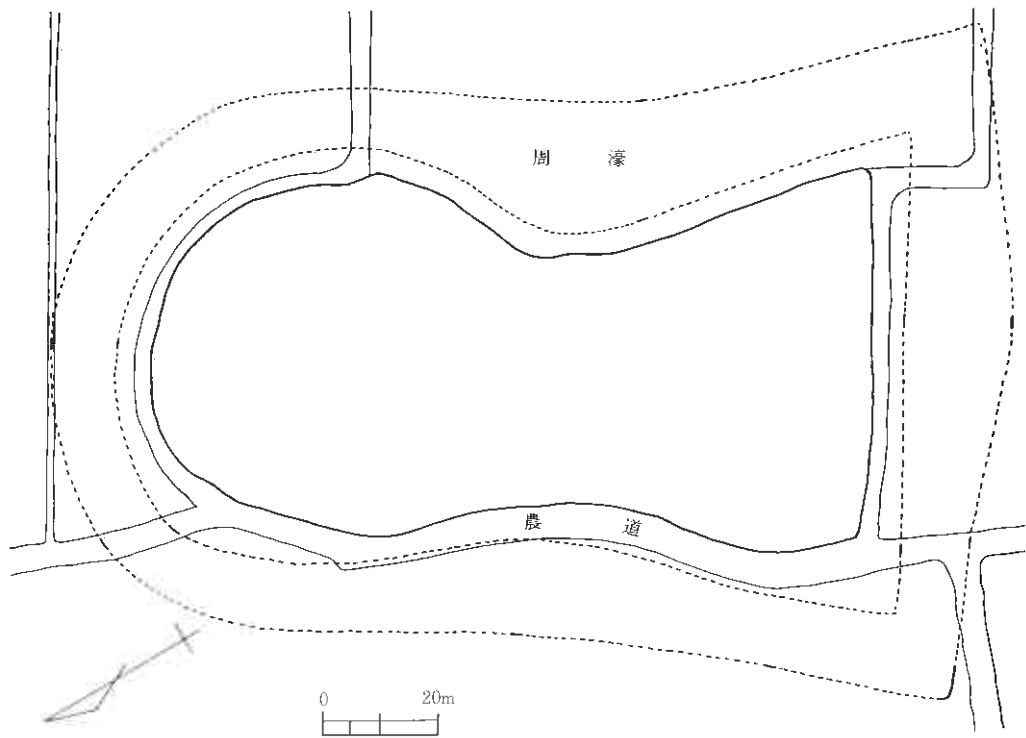
話によると、出土品は腐蝕した直刀と鏡、曲玉類で、櫛の内部は朱塗であったとしている。

昭和五十二年、五十三年には県教育委員会文化課によって周辺の調査がされ、濠の規模等を確認するとともに、濠から出土した土器等によって古墳の年代がほぼ確定できた。年代については調査担当者のひとり中村耕治氏が『古文化談叢』第十五集（昭和六十年七月）に、「鹿児島県曾於郡大崎町横瀬古墳出土の初期須恵器」と題して記し、五世紀中葉に位置づけている。

三、横瀬古墳群の現況

県教育委員会文化課の発掘調査によって濠の復元がなされ、その規模がほぼ正確に測定できる。『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』29（昭和五十九年）の測量図（第3図）によってその測定値を出すところになる。

主軸はN32度Eで、前方部が南西方向を向いている。周濠を含めた総長百六十五m、墳長百三十四m、前方部幅八十二m、前方部長六十一m、後円部直径七十二m、くびれ幅五十三mである。高さは現地表面から前方部が八・四五m、後円部が九・一二mあり、後円部と前方部の高低差は約七十cmであるが、石室の状況等から推察すると後円部はもう少し高いものと思われる。くびれ部の高さは五・四三mである。濠の幅は十一m、十八m、深さは約一mである。濠の下部には松かさや葦の纖維などが混在した泥炭状の黒色粘質土があり、その上には厚さ約十cmの紫色火山灰層がある。この火山灰層は紫ゴラと呼ばれている九世紀後半の開聞岳噴火の火山灰だといわれている。したがって、この濠は松かさの出土、



第3図 横瀬古墳の現況図（鹿県埋文報告書29より筆者が作成）

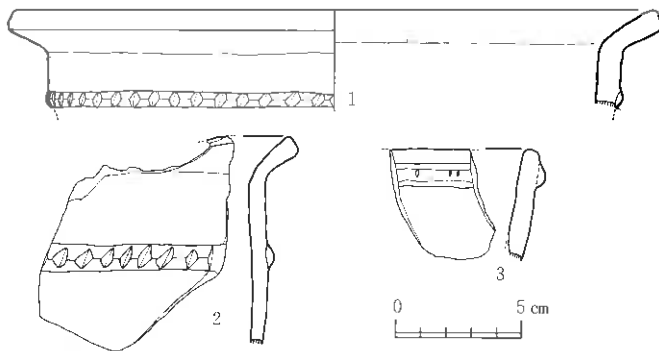
九世紀後半の火山灰堆積などから考えても長期にわたって、その形を残していたことがわかるが、記録によって江戸時代後半には埋もっていたらしいことが推察できる。

現在、前方部には地元の人達が「大塚神社」と呼んでいる神社があり、楠などの大木でうっそうとした森を成している。右側から掘り切りの小路をはいると狭い境内があり、小さなほこらがある。いっぽう、後円部は松くい虫によって松が倒れ、かや等の生い茂る草原になっているが、定期的に刈られたあとは墳丘の美しい曲線をながめることができる。その頂上部には浅いくぼみがあり、

堅穴式石室の天井石の一部をみることができるが、中まではわからない。古墳の周辺は圃場整備事業によって整然と区画された水田となっており、濠の状況を地上からうかがうことはできない。

四、遺物

横瀬古墳からは発掘調査で出土した資料の他に、かつて表面採集されたものが各地に分散保管されており、それには弥生土器・土師器・須恵器・埴輪などがある。



第4図 弥生土器・土師器

(一) 弥生土器・土師器 (第4図1~3)

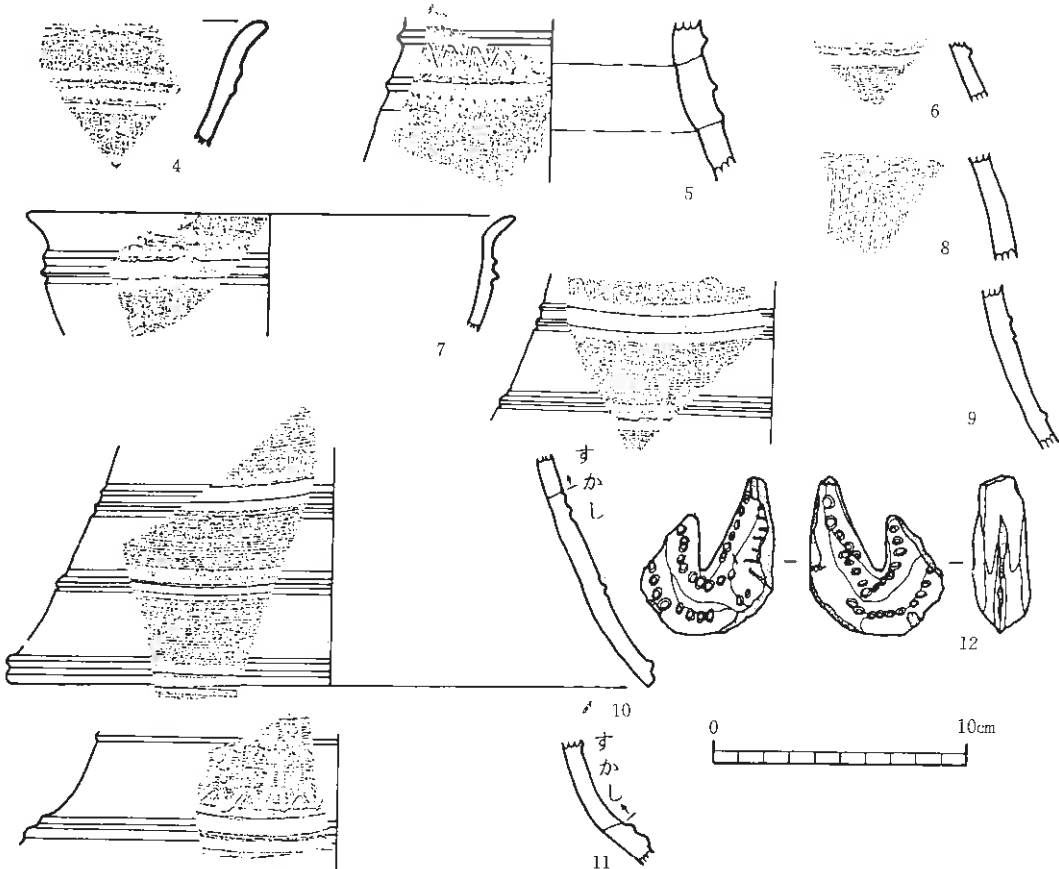
ここで紹介する三点は寺師家資料の中にあつたもので、採集地点は不明だが、埴輪などと共にあつたことから墳丘上からの採集品だろうと思われる。

1・2は口縁部がくの字状に外反するかめ形土器であるが、特に1は内面の稜がはつきりするほど強く反つている。復元口縁直径は1で二十五・二cmある。口縁下部に板状の施文具で斜方向押圧の施された凸帯が巡っている。頸部に比べて口縁部はやや肥厚している。両方とも表面が磨滅しているために整形痕がはつきりしないが、外面はへらによる横ナデ整形痕をみることができ、2の外面にはススが附着している。1は乳茶褐色を呈し、2は外面が白っぽい乳灰色、内面が茶色がかった灰色を呈している。ともに石英・黒雲母等の三〜四mm大の小石を多量に含んだ胎土を用いており、焼成度は普通である。

3は口縁部へまつすぐのびるかめ形土器で、口縁直下に凸帯が巡っている。磨滅しているためにはつきりしないが、ここにへら刻みの痕跡をみることができ、整形は内外ともにへらでナデしており、外面は横方向である。白っぽい淡茶褐色を呈し、外にはススが附着している。石英を特に多く含んでいるが、黒雲母などの細石粒を多く含んだ胎土を用いており、焼成度は普通である。

(二) 須恵器 (第5図4~12)

発掘調査により濠の中から古式の須恵器が出土している。詳細については先に紹介した中村氏の報文にあるのでここでは簡単に紹介したい。4~12はいずれも器台であるが、このうち4~6は伽耶系陶質土器、



第5図 須恵器 (中村氏報文より引用)

7、12は大阪府陶邑産須恵器だといわれている。

4はゆるやかに外反する口縁部で、口縁下部に2条の突帯があり、体部にも突帯がある。口縁下部と体部の突帯との間に7条の櫛描波状文がある。5は脚部で、これにも突帯があり、突帯間に4条の粗い櫛描波状文、突帯下に同一施文具によると思われる刺突文がある。6も脚部で突帯の下にヘラ描きの鋸歯状沈線を施す。これらは外、内面が黒色あるいは灰色、断面が暗紫色を呈する。

7はくの字状に外反する鉢形の口縁部で、口縁下部に2条の突帯がある。突帯の下に8条の櫛描波状文が2重に施される。8、11は脚部で、1条あるいは2条の突帯が3段にわたってみられ、突帯間には方形のすかし、ヘラ描鋸歯状沈線文、コンパス様施文具による点円文、10条の櫛描波状文などがみられる。12は裝飾付器台の裝飾部で、竹管状の文様と刺突文を施している。これらの内外面は灰色あるいは青灰色、断面は暗紫色を呈する。

(三) 円筒埴輪 (第6、8、13、35)

多くの円筒埴輪が各地に保管されているが、完形品はない。筒形円筒埴輪の他に朝顔形円筒埴輪もある。

13、14は朝顔形円筒埴輪である。13は中央のややくぼんだ台形状のタガ状突帯が巡る肩部で、肩の部分は表面が剝脱している。外面はいいいなナデ、内面はヘラによるたて方向ナデで仕上げており、内面には赤茶(チョコ)色の丹がうすく塗られている。14は筒部から体部に移る部分で、直径が二十八cmある。この境部分にタガ状突帯が巡っている。内面はヘラによる横方向ナデであるが、外面は筒部がハケによる横方向の

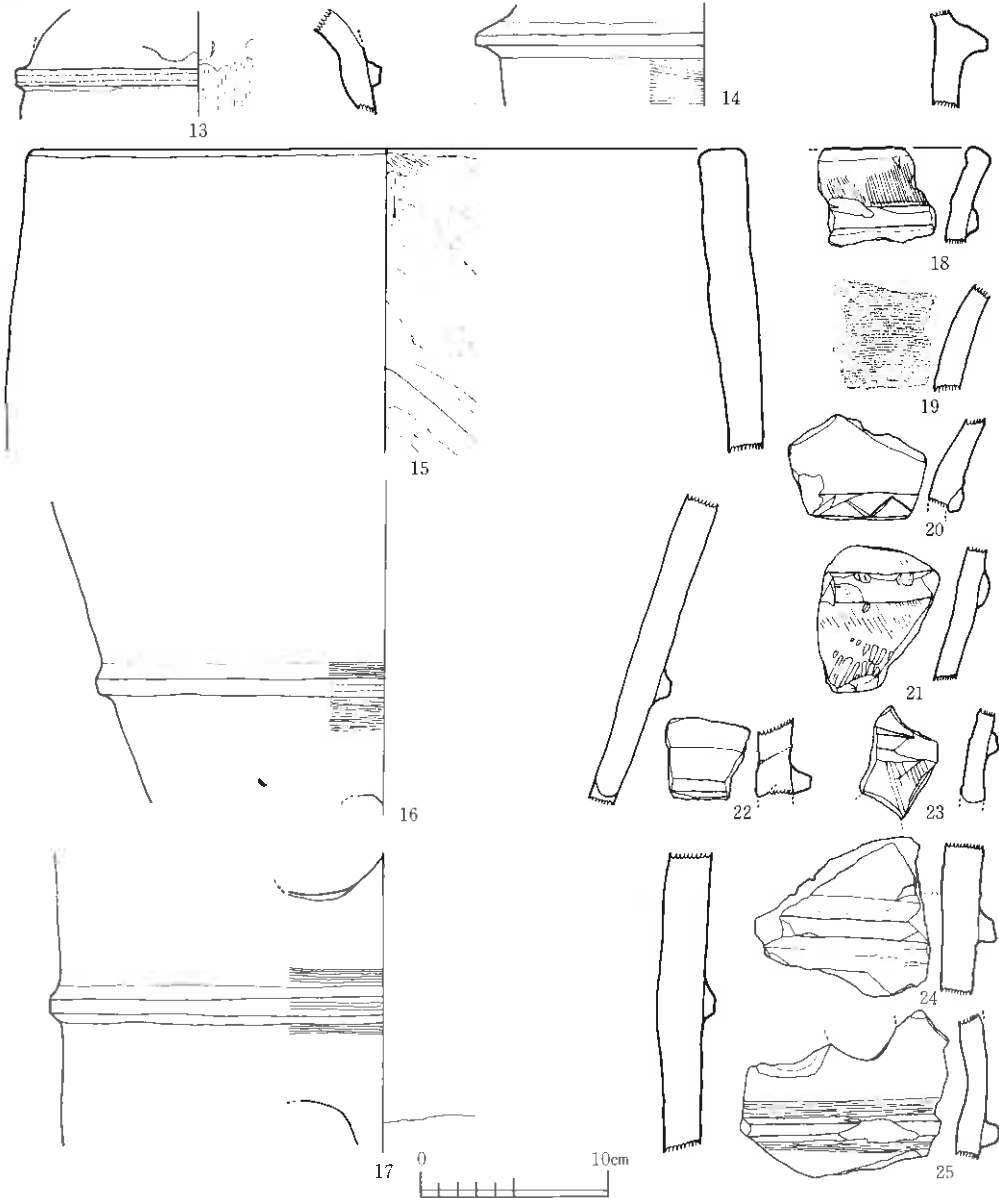
ナデ、体部がヘラによる横方向のナデで仕上げている。

15、35は筒形円筒埴輪である。15は口縁部がややすばまっており、直径が三十八cmある。やや開きながら底部へ向かう。外面はヘラによる横方向のいいいなナデ、内面は斜方向のヘラケズリである。16も口縁部近くで、上へ向かって外へ開いている。断面が台形状のタガ状突帯の下に円形のすかし孔がある。外面は突帯の付近のみハケによる横方向のナデがみられるが、その他はヘラによるいいいなナデで、内面もヘラによるナデ仕上げである。17は断面が台形状のタガ状突帯の上下にそれぞれ円形のすかし孔がある。口縁部に向かいやや開いているが、ほぼ直立している。調整は16に似ている。18は外へやや開いている口縁部で、口縁部のすぐ下に断面が台形状のタガ状突帯がある。外面はハケによるたて方向のナデ、内面はヘラによるたて方向のナデで仕上げている。19も口縁部付近で外へ開いている。内面はヘラナデであるが、外面はハケによる横方向ナデである。20、25はタガ状突帯の部分である。タガ状突帯は断面が台形状を呈するものが多く、中央がやくぼんでいる。20は突帯の部分にヘラ描きの鋸歯文がみられ、21は断面がかまぼこ状を呈する。23は突帯の下に、25は突帯の上に円形のすかし孔がある。外面調整はヘラでナデたものが多いが、突帯付近のみハケで横方向にナデたものもある。21の外面はハケナデで、タタキの痕跡もみられ、突帯の下には靦痕が残っている。23はあらい板目痕跡がある。内面調整はほとんどがヘラによるたて方向のナデであるが、20、23は斜方向のハケナデである。22はつぎ目が顕著に残っている。

26はもともと残存度の良いもので、タガ状突帯が2条ある。底部の直

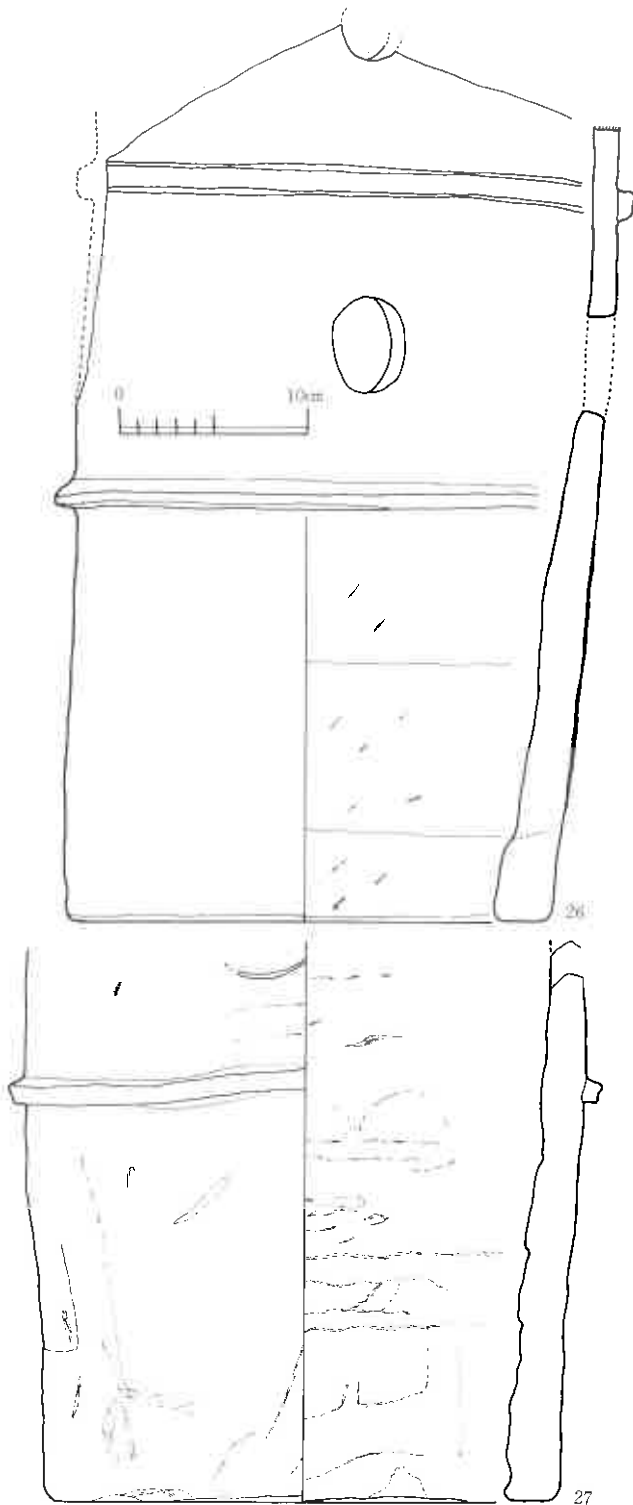
径が二十六cm、一条目の突帯下で直径二十八cm、二条目の突帯下で直径二十八cmとやや開きながらも、ほぼ直立している。現在の残存長は四十八cmある。二段目・三段目には、それぞれ三個ずつの円形すかし孔がある。外面の一次調整はせんい状ハケナデで、二次調整としてヘラによるていねいなナデがある。ヘラナデは一段目のみたて方向(部分的に横方向)で、二段目と三段目は横方向である。内面もヘラによるたて方向のナデであるが、凹凸が目立つ。27も調整は26と同じである。タガ状突帯は断面が台形状を呈し、中央がややくぼんでいる。底部は凹凸が目立ち、アンペラ状のものを敷いて作ったことを示している。28・29も底部である。外面はヘラによるていねいなナデで、内面はヘラによる斜方向のあらいナデで仕上げている。内面の端部は指あるいはヘラの圧痕が残っており、複雑な積みあげ痕跡を残している。

30、35は円筒埴輪にヘラ描き文様が



第6図 円筒埴輪(1)

みられる。30・32・35はたて長の菱形文がある。30は丸みをおびたタガ状突帯の下に四重になった菱形文がみられる。内面・外面ともヘラによるナデで仕上げている。32は底部で、最下段に三ノ四重の菱形文が接触したりしてヘラで描かれている。それぞれの線は離れたりして必ずしも致密でない。その右側には極端にたて長の菱形みたいなものが描かれているが、文様構成がはっきりしない。外面はヘラによるていねいなナデである。内面はあらいナデで凹凸が激しく、下部のほうには指圧痕がみられる。下端部にはせんい状圧痕がある。積み上げも雑で、あとから内に貼り付けたりして複雑である。35も四重の菱形文がある。31はタガ状



第7図 円筒埴輪(2)

突帯と円形すかし孔との間に、三本のたて線と、その間にある斜線から成る綾杉状の文様がある。外面は突帯の上がせんい状ハケナデで、突帯の下がヘラによるていねいなナデで仕上げている。内面はあらい横方向のナデで凹凸が激しい。33はタガ状突帯が剝脱しているが、その下にたて方向と斜方向の直線・曲線の混じた三角文が背中あわせにある。内・外面ともナデで仕上げているが、内面は横方向である。34は円形のすかし孔の左手に二本の縦線とその間に二重鋸歯文がある。内・外面ともヘラによるていねいなナデで仕上げている。

この他に先の発掘調査では多くの円筒埴輪が出ており、概報では二点

紹介されている。それによると、底径は約三十三cmで、底部はひとつが幅約三・七cm、長さ約二十五・五cmの粘土板を四枚つなぎ合わせ、あとひとつは幅約三・五cm、長さ約三十三・五cmの粘土板を三枚つなぎあわせているという。そして、底部には共にワラ様の圧痕が認められる。

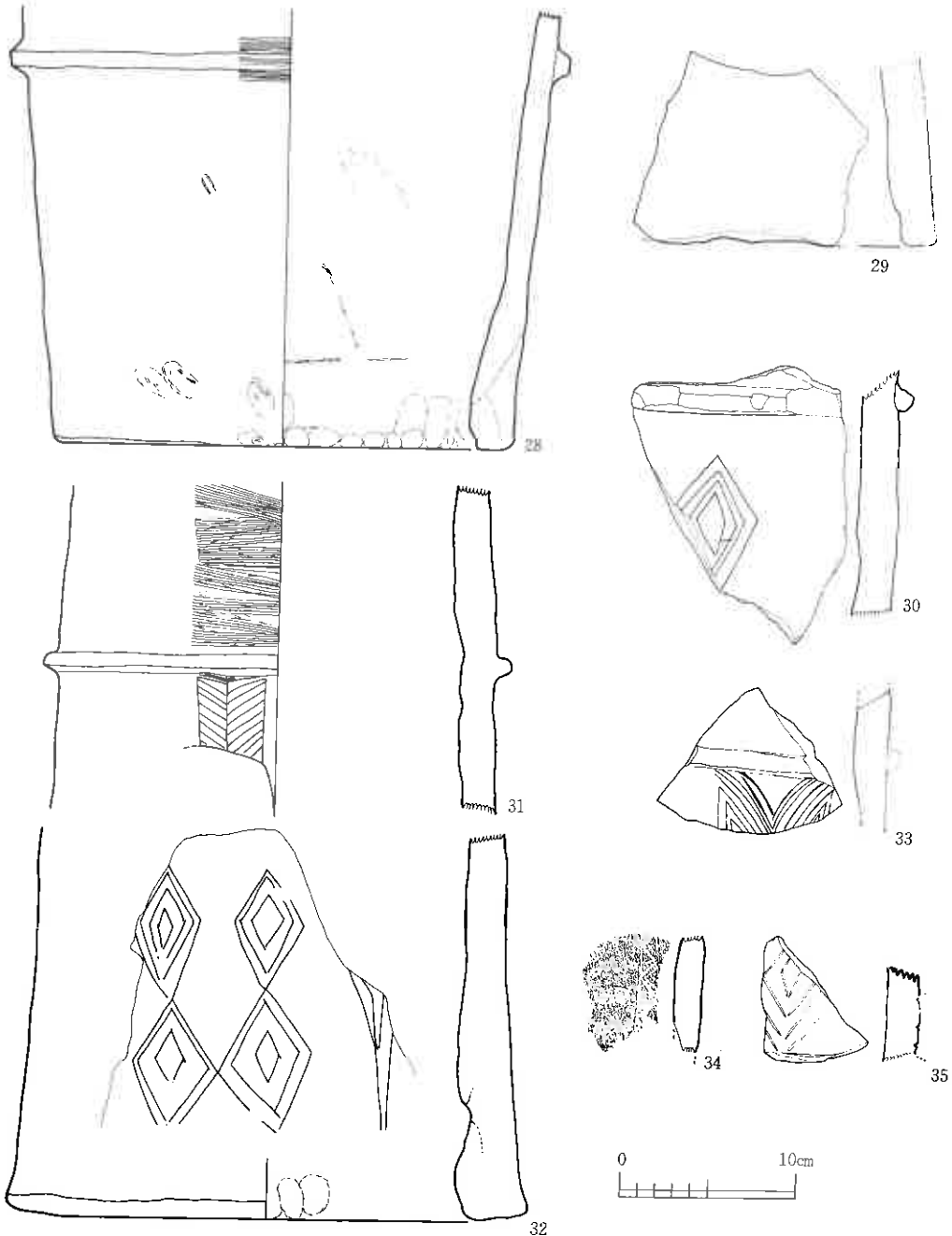
(四) 形象埴輪(第9・10図)

従来、横瀬古墳出土の形象埴輪は楯が知られていたが、寺師家資料の中には人物埴輪・動物埴輪・器材埴輪などもあり、云い伝えによると、かつては馬なども出ていたようである。

① 人物埴輪(36・45)

破片だけしかないのでに内容をうかがうことは困難だが、数個体分あるようである。

36・38は指の部分が残った



第8図 円筒埴輪(3)

手先である。36は指先が折れているが、親指を中に折った左手である。手自体も内側へ丸く折り曲げており、結んでいる格好をしている。ていねいにナデている。37は指をびったりとそろえた右手先で指はほっそりしてスマートな形をしており、薬指は爪も表現されている。手の状況からみて、手を床に付けた様を表現している。細い棒状のものを手の甲でくっ付けており、せいいい状ハケナデの痕跡もみられる。38も指が付け根から折れているが、親指を中に折った左手首付近で、内側へ丸く折り曲げ、結んだ格好をしている。四本の指はかすかに沈線が残っており判別ができるが、薬指と小指の境ははっきりしない。手首には球状のものが付いた腕飾りを巻いている。球状のものは三個が現存しているが、剝離痕からして元来四個あったものと思われる。球状のものとの間は沈線で結んで輪を表現している。手首までは棒状の粘土塊のまわりに土を巻く手法で作っており、手首より先は土をケズリながら形作っていったものと思われる。ヘラでナデて表面を仕上げている。

39と40は前腕部である。この部分は指で丸めた棒状の粘土塊のまわりに板状のものを巻いて形を整えており、40はしんの部分に指圧痕が残りに板状のものとの間に空洞がある。39は両端とも剝脱痕をみる右腕と思われる破片である。板状のハケメが一部に残っているが、ほとんどをヘラでナデている。40は右腕の上腕部に近い所で、部分的にせいいい状のハケメが残っているが、ヘラでていねいにナデている。

41と45は上腕部で、中は空洞になっている。41・42は肩に近い部分で42は板状のハケナデで仕上げているが、その一部に粘土を貼り付けて、そこにはせいいい状ハケナデがみられる。表面には沈線二本がみられるが

その形態ははっきりしない。赤みがかった茶褐色(チヨコ色)を呈する丹が塗られている。図の左側は段落ちがみられる。内面はあらいなナデ整形である。43は右手で、内・外面ともヘラによるナデであるが、外面がていねいなナデであるのに対し、内面は凹凸があり、しぼり痕が目立つ。44・45はていねいなヘラナデの上に、ヘラによる直の沈線文、刺突文があり、肩甲を付けた武人かと思われる。44は一部に丹がみられる。内面はあらいなヘラナデで、45の内面をみると板状粘土板を次々と重ねながら継いでいった行程がうかがえる。

② 動物埴輪 (46と50)

46と47は裝飾馬の鈴と思われる。直径二・五cmほどの手で握った球状のもの的一端にヘラ様のもので一線が引かれ、この線の反対側には剝脱痕がみられる。くつわ鏡板か杏葉、雲珠などに付された鈴であろうか。

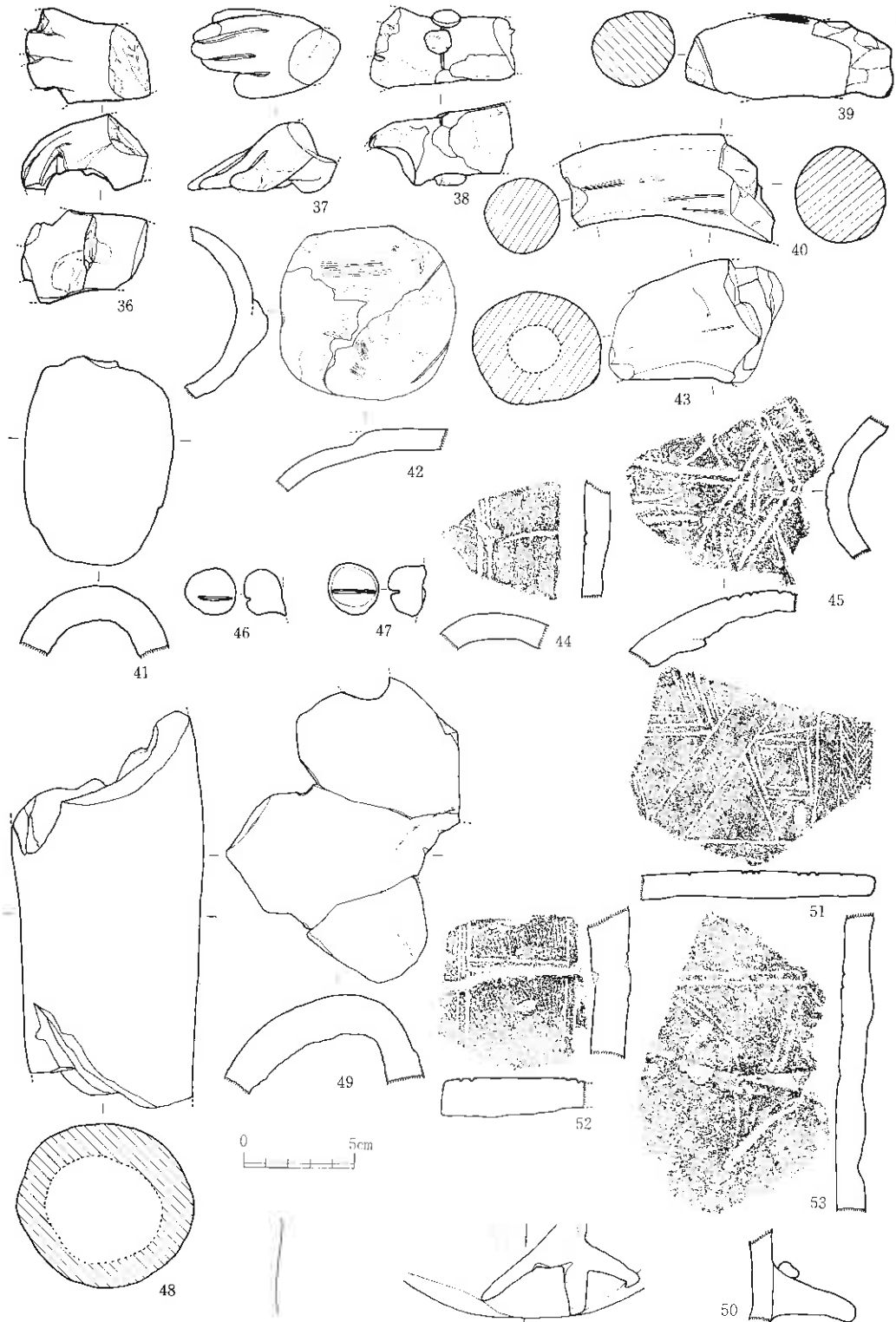
48は筒状を呈するもので、馬・犬など動物の脚部と思われる。太い所で直径九cm、細い所で直径七・五cmで、器厚は一・五cmある。外面はヘラによるていねいなナデで、内面のナデもていねいである。

49は水鳥の胴部であろう。胴の下部に円形のすかし孔がある。中は空洞となっており、器厚は一・八cmある。外面はヘラによるていねいなナデであるが、内面のナデはあらいな。

50は直径二十二cmの筒形にすそ広がり突起が付き、その上に三本指の脚が貼り付いている。水鳥であろうか。内・外面ともヘラでていねいにナデて仕上げているが、部分的にハケメも残っている。

③ 器材埴輪 (51と60)

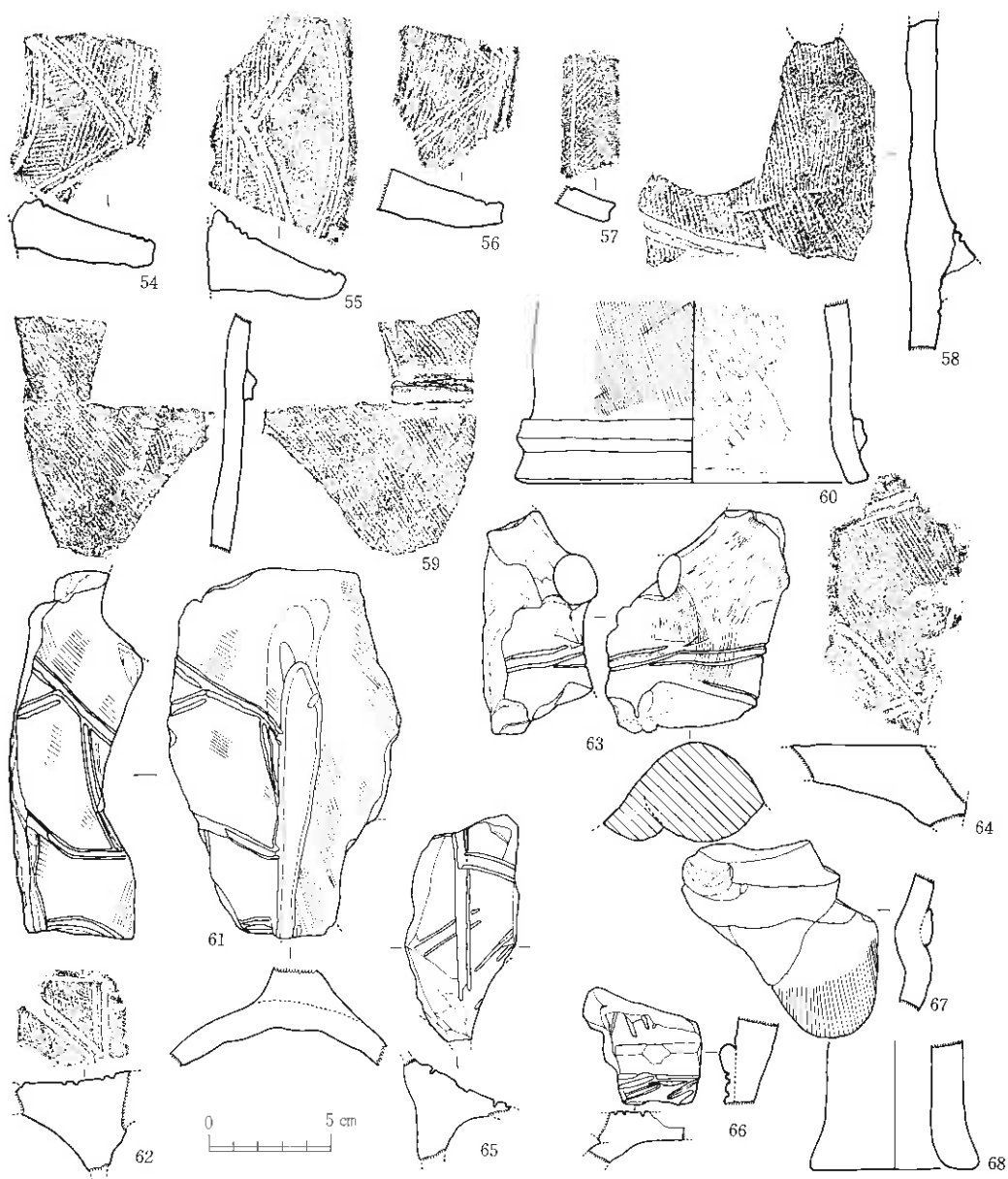
柄・草摺などを模したものである。



第9图 形象埴輪(1)

51、53は楕で、第2図の右側のものもこれである。51は右端に綾杉文があり、その内側に縦横線、斜行線、菱形文の組み合わさった文様がある。表・裏面ともヘラでナデで仕上げ、器厚1〜2cmと薄く作っている。52は縦あるいは斜方向のハケナデの上に平行する二条の縦線と横線の直交する文様がある。表には丹が塗られ、裏はヘラによるあらいナデで、やや凹凸がみられる。53は平行する二条の横線と斜行線、弧線が組み合わさって直弧文を作っている。表・裏面ともヘラによるナデであるが、裏のナデはあらく凹凸が目立つ。

54、60は裾の広がった突起の付いた埴輪で、外面調整がハケによるナデである。草摺の可能性がある。54、56は同一個体と思えるもので、外面は縦あるいは横方向のハケナデの上に二条ずつの凹線文がみられる。上端と下端に平行する横方向の凹線があり、その間に鋸歯状の文様が描かれる。裾の幅は



第10図 形象埴輪(2)

第1表 埴輪観察表

図番	器種	色	胎土	焼成度	保管場所	備考
13	朝顔形円筒埴輪	黄みがかった茶褐色	石英・黒色石・白色石など小石が多い土	普通	寺師家資料	
14	〃	茶褐色	赤色石や石英など小石が多い土	良好	〃	
15	筒形円筒埴輪	赤みがかった淡茶褐色	石英・長石・黒雲母など細かい土	〃	大崎町郷土館	頂部のみ黒褐色
16	〃	茶褐色	白色石・赤色石・石英など小石が多い土	〃	宮崎県博	
17	〃	〃	石英・長石・黒雲母など細かい土	〃	大崎町郷土館	
18	〃	黄みがかった茶褐色	黒色石・石英・白色石など小石が多い土	普通	寺師家資料	磨滅している。中心部は灰色
19	〃	淡茶褐色	〃	良好	〃	〃
20	〃	〃	白色石・石英など細かい土	〃	〃	
21	〃	茶褐色	白色石・石英・赤色石など小石が多い土	普通	〃	
22	〃	茶褐色 (内面は白っぽい)	白色石・石英など細かい土	〃	〃	
23	〃	淡茶褐色	〃	〃	〃	
24	〃	茶褐色	白色石など小石が多い土	良好	〃	
25	〃	淡茶褐色	〃	ふつう	宮崎県博	
26	〃	茶褐色	石英・長石・黒雲母・鉄石など細かい土	良好	志布志高校	基部内面は灰褐色がかかる
27	〃	〃	石英・白色石など小石が多い土	〃	黎明館	
28	〃	〃	白色石・石英など4mm程度の小石まで含むが細かい土	〃	宮崎県博	内面やや磨滅
29	〃	淡茶褐色	細かい土	〃	大崎町郷土館	表面磨滅
30	円筒埴輪(文様)	茶褐色	白色石・石英など細かい土	普通	黎明館	
31	〃	〃	石英の多い細かい土	良好	志布志高校	
32	〃	〃	〃	普通	〃	
33	〃	〃	長石の多い細かい土	〃	〃	
34	〃	〃	白色石・石英・黒雲母の多い土	良好	寺師家資料	
35	〃	〃	白色石・赤色石など小石が多い土	普通	宮崎県博	
36	人物埴輪	淡茶褐色	石英・長石など小石が多い土	〃	寺師家資料	
37	〃	乳淡茶褐色	〃	〃	〃	
38	〃	茶褐色	黒雲母・赤色石・白色石など細石の多い土	良好	〃	
39	〃	淡茶褐色	〃	〃	〃	
40	〃	赤みがかった茶褐色	白色石・黒色石など多くの小石を含む土	〃	〃	須志賢
41	〃	淡茶褐色	茶色石・黒色石などの小石粒を多く含む土	普通	〃	磨滅している
42	〃	黄みがかった茶褐色	黒雲母・石英・白色石など細かい土	良好	〃	
43	〃	淡茶褐色	赤色石・白色石・石英・黒雲母など小石の多い土	〃	〃	
44	〃	〃	白色石・石英など細かい土	〃	〃	
45	〃	〃	〃	〃	〃	
46	動物埴輪	茶褐色	白色石・黒色石など多くの小石粒土	〃	〃	
47	〃	白っぽい淡茶褐色	〃	普通	〃	
48	〃	茶褐色	茶色石・灰色石・黒雲母などの小石の多い土	〃	〃	
49	〃	淡茶褐色	〃	〃	〃	
50	〃	乳茶褐色	赤色石・黒雲母などの小石の多い土	良好	〃	
51	器材埴輪	茶褐色	白色石・石英など細石粒の多い土	〃	〃	
52	〃	黄みがかった淡茶褐色	赤色石・石英など小石の多い土	普通	〃	
53	〃	茶褐色	〃	〃	〃	
54	〃	黄みがかった淡茶褐色	茶色石・石英など多くの小石を含む土	良好	〃	55・56と同一個体か
55	〃	〃	〃	〃	〃	
56	〃	〃	〃	〃	〃	
57	〃	茶褐色	赤色石・白色石・黒雲母などの多い土	〃	〃	
58	〃	灰褐色	白色石・青灰色などの小石粒の多い土	〃	〃	須志賢
59	〃	〃	石英・黒色石・白色石の小石の多い土	〃	〃	〃
60	〃	〃	〃	〃	〃	〃
61	〃	黄みがかった淡茶褐色	赤色石・茶色石・黒雲母・石英などの小石の多い土	〃	〃	
62	〃	茶褐色	白色石・黒雲母などの細石粒の多い土	〃	〃	
63	〃	〃	黒色石・赤色石・黒雲母・茶色石など小石の多い土	〃	〃	
64	〃	〃	〃	〃	〃	
65	〃	〃	〃	〃	〃	
66	〃	淡茶褐色	白色石・黒雲母などの細石の多い土	〃	〃	
67	〃	黄みがかった淡茶褐色	赤色石・灰色石・石英・黒雲母などの小石の多い土	普通	〃	
68	〃	〃	〃	〃	〃	

約6cmあり、端に向かい下へ落ちながら細くなつていき、端部は中央のくぼんだ台形状のものと、丸みをおびたものがある。内面調整は、一部にせまい状ハケナデがみられるが、ヘラのナデで仕上げ凹凸がみられる。57も同じようなものだが、内面調整が外面と同じくハケナデである。58は裾部と円筒部との接合部分で、ここに二条の凹線文がみられ、上部には円形のすかし孔がみられる。裾の下にも一条の横方向凹線がある。外面調整は裾の上はハケナデであるが、下はヘラナデである。内面はナデているが、施工具ははつきりせず指かとも思われる。59は円筒部で、中央のくぼんだ台形状を呈するタガ状突帯が巡る。60は円筒底部で、58・59と同じく須恵質を呈する。底部近くに中央のくぼんだ台形状を呈するタガ状突帯が巡っている。外面の底部付近、内面はヘラのナデで仕上げしており、底にはススキのような禾本科植物の押圧痕がみられる。

④その他の形象埴輪(61～68)

61～65はひれ付形象埴輪で形状不明であるが、63のようなものは短甲を付けた武人のようにもみえる。61はひれの最上部で、本体からひれにかけて二条の平行凹線が横・斜方向に組み合つて文様を構成している。裏には円形のようなすかし孔がみられる。表裏面には横あるいは右下がり方向のハケナデ、内面は凹凸が目立つ右下がりのせまい状ハケナデで仕上げている。62の表面は縦あるいは右下がりのハケナデの上に二条の平行凹線で正方形を描き、その中に右下がり線がみられる。裏面および内面はヘラによるナデで仕上げている。63は充実した体部で左手に左下がりの直径2cmほどの棒状突起が伸びている。その下に表から側部にかけて二条の凹線が巡っている。表面は縦あるいは斜方向のハケによるナ

デで仕上げているが、側面はヘラナデである。棒状の粘土塊を接合しながら立体化しているが、この粘土塊にもせまい状ハケナデが一部にみられる。64は平板状を呈し、この表裏に板状の突起が付くものである。表面は右下がりのハケナデの上に縦方向と鋸歯状の二条凹線がある。裏面はヘラによるナデで仕上げている。65もひれの下部付近で、表面はヘラによるナデの上に縦方向と斜方向の平行する二条凹線が引かれる。凹線の順序は下の斜線↓縦線↑上の横線となっている。裏面はハケナデの上をヘラナデで、内面はせまい状ハケナデで仕上げている。内面下部に粘土塊の積み上げがみられる。

66は横方向の貼り付け突帯の上下に縦・横あるいは斜方向の凹線がみられる。円筒状を呈し、これら文様の部分は突出した形態になっている。内・外面ともヘラによるナデで仕上げ、外面にはアズキ色の丹が塗られている。

67は朝顔形埴輪様の頸部に帯状突帯が貼り付けられており、その形状ははつきりしないが、あるいは三本足となるのかもしれない。外面は縦方向のハケナデ、内面はヘラによるナデで仕上げている。

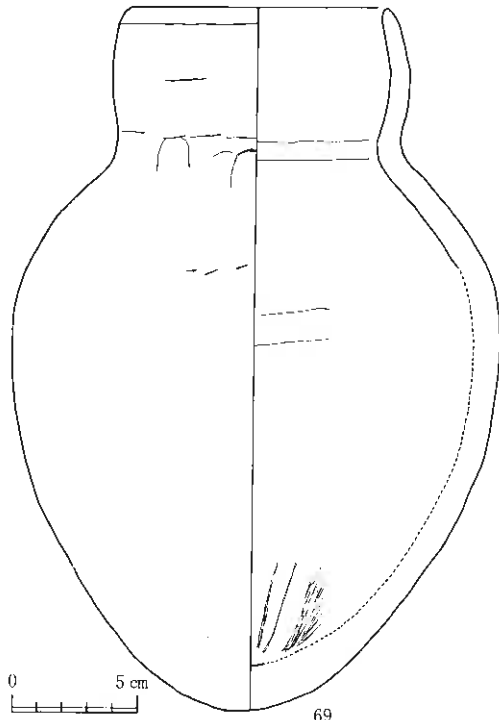
68は底径が7cmの円筒形底部で、内・外面ともナデで仕上げている。

(五)その他の出土品(第11図69)

ここで紹介する土師器は、現在、川内市新田神社の宝物殿に収蔵されているものであるが、墨字で①大崎町字横瀬大塚山古墳西方の陪塚からの出土品であること。②寄贈者が岩元篤氏で、大正五年五月に寄贈したということが記してある。

口縁部が丸く内曲した丸底の壺形土器で、口縁端の直径が十・四cm、

高さが二十八cmある。頸部から口縁部へ向かいややふくらみながらも、また内曲し、端部付近ではさらにゆるやかに屈曲している。最大径は中央よりやや上にあつて十九・五cmある。外面はヘラによる縦方向のナデで仕上げているが若干凹凸がみられ、磨滅が激しい。頸部付近にはヘラ押圧の跡が残っており、底部には木の実大の圧痕があつてくぼんでいる。内面はヘラによるていねいな横方向ナデで、底部付近のみは縦方向である。部分的に薄く剥脱している。石英・黒雲母・砂岩粒など二〜四mm大の小石粒を多く含んだ砂質土を用い、焼成度は良好で堅いが、縦方向に一か所ヒビがある。茶褐色を呈する所と、黒褐色を呈する所が半々である。



第11図 土師器

この壺形土器は丸底であること、最大径が中央よりやや上にあることなどから五世紀前半頃のものと思われる。なお口縁部が内曲する点、本県の土師器とは異質であるが、器厚・色調・器形など先の(第4図)土師器とは異なり、こちらで作られたものかと思われる。

その他、盗掘の際、鉄刀・短甲・曲玉・鏡などの出土したことが書かれたものもある。

五、南九州での特殊性

横瀬古墳群は、鹿児島県の古墳としてはきわめて特殊な要因を数多く備えている。以下、その二、三について指摘してみよう。

(一) 陪塚の存在

当古墳の周辺は現在では昭和五十年代の耕地整理によつて整然とした区画がされており、近くには保育園も建っている。したがつて、周辺に陪塚らしい小山を見ることはできない。このことは、すでに大正五年の瀬之口報文によつても指摘されている。昭和十一年に発行された五万分の一地形図は明治三十四年に大日本帝国陸地測量部によつて作成(昭和七年と十年に部分修正)されたものであるが、これでも周辺にはそうした小山は表わされていない(ただ、この地図では唐仁大塚古墳のまわりにもほとんど古墳が表わされていないことから必ずしもないとは断定できない)。しかしながら、大正十二年の瀬之口報文ですでに周辺に陪塚のあったという古老の言を紹介しており、その後も山崎等がそのことを記しており、現在でも地元の人達は存在したことを言い伝えている。

ところで、第2表でみられるように、現在鹿児島県内には、はっきり確認できた前方後円墳が二十あるが、この中には陪塚をもつものは今の

第2表 鹿児島県の前方向後円墳

No	古墳名	所在地	主軸方位	墳長	前方部			後円部		葺石	
					長さ	幅	高さ	直径	高さ		
1	飯盛山古墳	志布志町夏井ダグリ崎	N80°W	80	43	20	1.5	30	4.5	○	破壊 <small>（竪穴式石室、在形崩壊 与長・丸形・小玉）</small>
2	小牧1号墳	安楽小牧	N30°W	21	10.5	7	0.8	9.5	1.4		須恵器・土師器
3	飯隈8号墳	大崎町飯隈稲荷畑	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明		破壊
4	神領6号墳(天子丘古墳)	神領天子丘	〃	43	〃	16	2	18.6	3		竪穴式石室、土師器、須恵器 刀・短冊
5	〃11号墳	横瀬竜相	N115°W	30	15	不明	1.6	不明	3.1		半分破壊
6	〃13号墳	〃	N48°E	21- α	7+ α	10+ α	2+ α	16	2+ α		上部平坦化
7	〃16号墳(鏡島岡古墳)	〃	N140°W	34	15	8	2.6	12	3.5		整石製箱式石棺
8	横瀬古墳(大塚山古墳)	〃	N150°W	134	61	82	8.5	72	9.1		周濠幅1~18(深1)整穴式石室
9	上小原4号墳	串良町上小原の上5177	N95°W	23.5	13.5	6.4	0.9	10.7	1.6		
10	塚ノ下5号墳	〃	不明	10	不明	5	0.4	10	0.8		破壊
11	供養の上1号墳	〃	〃	13	4.2	3	0.7	6.8	1.1		〃
12	唐仁1号墳(唐仁大塚古墳)	東串良町新川西5095	N170°W	137	70	48	2.3	68	9	○	周濠幅29~30(整穴式石室、箱式石棺埋没)
13	〃12号墳(大山塚古墳)	〃	N165°W	14+ α	不明	不明	不明	11.5+ α	2		前方部破壊
14	〃16号墳(鏡島塚古墳)	〃	N165°W	45	22	22	3.0	31	3.9		
15	〃100号墳(鏡島塚古墳)	大塚1527	N155°W	57	35	25	2.7	23	3.3	○	
16	〃129号墳	〃	N165°W	8	5	5+ α	0.7	5.5	1		
17	塚崎10号墳(新塚古墳)	高山町野崎長五郎2214	N120°W	39	15	9.5	1.0	23	2.6		
18	〃11号墳(鏡島塚古墳)	〃	N150°E	56	28	12.5	1.9	22	3.4		
19	〃16号墳	〃	N145°W	41	19	8.5+ α	1.0	26	4.0		
20	〃39号墳(花牟礼古墳)	新宮花牟礼小塚7579	N15°E	71	31	21	2.9	45	9.0	○	

単位：m

本表作成のために筆者は宮原景信氏・萩原幸一氏とともに昭和61年12月1日・2日と、昭和62年1月21日～23日の2回にわたって県下の前方後円墳を実査し、巻尺・トランシット等で略測を実施した。計測点は前方後円墳研究会の方法にしたがった。その結果、これまで公表されていた数値とだいぶ異なるものがあったが、本表の数値は今回の実査によるものを原則として用いた。

これまで県遺跡地名表や上村俊雄氏の諸論文等で公開されてきた前方後円墳については、すべて表面観察を行ったが、人工の盛り土でなく自然丘陵であるものが4か所あったので、この表では除外した。輝北町双子塚古墳、有明町山神ノ上古墳、高山町今市1号墳、同2号墳である。大崎町小塚古墳は石人石馬研究会の地名表のみに記され、その位置・規模とも不明なためこれも除外した。また山崎五十磨『鹿児島県の古墳と当時の文化』（昭和十八年）の唐仁古墳群の分布図（昭和五年島戸貞良調査）では6号墳と64号墳も前方後円墳となっているが、現在は円形あるいは方形をしており確認できない。6号墳は周辺が畑になっており、現状は方形化している。64号墳は多くの葺石があり、地元の話では昔から杉林で変形していないといわれており、帆立貝形前方後円墳の可能性もないことはないが、その確率は低いといえよう。現在、大崎町飯隈8号墳、同神領6号墳、串良町塚ノ下5号墳、同供養の上1号墳は形をとどめておらず精査ができず過去の計測値を転用した。志布志町飯盛山古墳も同様であるが、これは図から復元した。志布志町小牧1号墳、大崎町神領13号墳、同横瀬古墳は県教委の実測図より計測値を出し、東串良唐仁1号墳については古い略測図より計測値を出した。

ところ確認されていない。宮崎県に眼を移してみると、^{〔注〕} 国富町六野原第三号古墳、西都市松本塚古墳、西都市船塚古墳、西都市西都原三十五号古墳、同七十二号古墳、同百五十九号古墳などが陪塚をもっており、皆無とはいえないが、その数は少ない。

横瀬古墳に陪塚があつたか否かについて今日判断する材料はないが、瀬之口報文以来の指摘は、当古墳の周辺地形をみる時に陪塚以外に自然地形としての小丘が考えられないこと、水田の中にある前方後円墳の場合に陪塚をもつことが南九州においてもみられること、さらに新田神社にある壺形土器の形態は横瀬古墳の年代観とはほぼ一致することなどから、当を得ていると考えたい。とすれば、現在のところ本県においては唯一の陪塚をもつ前方後円墳であり、その被葬者の性格がうかがい知れる。陪塚から出土している遺物については、現在のところ壺形土器くらいしか知る手がかりがないが、主墳からの出土品がごとごとく地方性を認められないものであるのに対して、この壺形土器は口縁部が内湾して立ち上がるところに一部分、東九州の様相をみせるものの、先にも記したように器厚・色調・器形などは南九州独特のものである。この現象は、主墳の被葬者と、陪塚の被葬者との関係、立場の違いといったものを示すものといえようか。

(二) 立地の特殊性

弥生時代と古墳時代を分ける示標に高塚古墳の発生時点で分ける考え方と、土器の違いから考える方法とがあるが、いずれにしても画然としたラインは引けない。高塚古墳の発生を地表面上に盛り土を見出す時点とすれば、すでに弥生時代の中頃にもみられる現象であり、大衆と異

なる大型墳の発生といつても、それをどの位の大きさからとすればよいかによって人の考え方は異なる。

ところで、古墳時代初期の古墳を立地の観点からみる時、歴然とそれ以前と異なるのはそれが集落から離れた丘陵端、あるいは丘陵頂に造られる場合が多いことである。集落と墓地の区別はすでに縄文時代晩期にみられるが、弥生時代までの墓地は同一空間内に場を変えて存在するのが普通である。それが古墳時代になると、丘陵上の集落を見おろす場へと変わってくるのである。ここに立地上、大きな変化が見出されるのである。これが古墳時代の後期まで続く場合、中期になってまた低湿地へおりてくる場合などがあるが、南九州ではどうであろうか。

南九州東岸の^{〔注〕}古墳立地をみると、そのほとんどが台地縁辺部に位置することがわかる。この地はまた生活の場でもあると思われるが、一体化して調査されたものがないために確認できていない。

こうした中で例外的に丘陵上にあるもの、あるいは低湿地にあるものがあるが、それらは以下に示すように南九州では特殊なあり方を示している。まず丘陵上にあるものとしては宮崎県では新富町下屋敷一号墳、宮崎市靈山古墳、日南市速日峰古墳、同伊比井古墳などが、鹿児島県では志布志町飯盛山古墳などがある。これらの古墳は共通する点として、海に面しているということが挙げられ、立地上、古式の古墳であると思われる。いっぽう、低湿地にあるものとしては高鍋町亀塚古墳、西都市松本塚古墳群、宮崎市船塚古墳などが挙げられるが、これらに共通している点は、周濠をもつ前方後円墳か、その陪塚であることである。両方ともに全古墳数からすればほんの一握りの数で、まさに特殊な古墳

立地をしているということができよう。

鹿児島県の数少ない前方後円墳のほとんどもまた台地縁辺部に円墳などとともに群をなして所在しているのが一般的であり、低湿地にある横瀬古墳はその点からも唯一の前方後円墳である。そして、対象を円墳にまで広げてみても唯一である。ここでもまた横瀬古墳の特殊な性格が表われている。

(三) 埴輪の出土

本県では横瀬古墳の他に埴輪が出土しているのは志布志町飯盛山古墳のみである。飯盛山古墳のものは壺形埴輪である。東串良町唐仁大塚古墳も埴輪の出土したことが指摘されているが、現在まで残存したものがないこと、現在階段あるいは登り道となっている所を丹念にみても見当たらないこと、後円部の傾斜がきついうえに前方部との比高差が大きいことなどから埴輪列の存在はあり得ないのではないかと思える。また、鹿児島県聖蹟調査会が昭和十八年に刊行した『鹿児島縣の古墳と当時の文化』（山崎五十磨）には、「大崎町の或る古墳から頭部の破片が発見せられたことを聞きたるも実物は見ない」とあるが、これも横瀬古墳のことではないかと思われる。

横瀬古墳の場合、その数・種類とも本格的に埴輪をめぐらす古墳であり、日本ではもつとも南に位置する埴輪保有の古墳である。大正十二年の瀬之口報文は埴輪列を少なくとも二重としているが、今日それを確認することはできない。ただ大塚神社へ行く道の両側断面を観察すると、前方部の端付近にも埴輪片が検出されることから複数の埴輪列が巡っていたことは確かであろう。

さて、当古墳出土の埴輪について、その位置づけを考えてみよう。

まず、円筒埴輪の特徴を列記すると①筒形のもの朝顔形のものがある。②内・外面ともヘラナデで仕上げるものが多く、一部にみられるハケナデはいわゆるヨコハケA種（断続的なヨコハケ）である。③底部調整がない。④タガ状突帯の断面形は中央がやくほむものもあるが、基本的には台形状を呈する。⑤スカシ孔はタガ状突帯間に三個ずつあり、その形状は円である。⑥黒斑のあるものはなく、ほとんど土師質であるが、須恵質のものもある。⑦底部にススキなど禾本科植物を敷いた痕跡がみられる。⑧基部は三枚、四枚の粘土板をつないで一周している。次に形象埴輪の特徴を列記すると①種類は人物・鳥・馬・楯・草摺などがある。②須恵質のものがある。

これを川西宏幸氏の編年^注に当てはめてみると、いくつかの相違点はあるがⅣ期に相当し、同時に出土した須恵器などの年代とほぼ一致する。調整の違いは周辺に比較する資料が少ないために、これをどのあたりの地域にみられる特徴なのか示すことはできない。須恵質に焼けたものがあることから、これらの埴輪は須恵器と同じような登り窯で焼かれたことが予測できるが、同時に出土した須恵器は胎土分析によると大阪の陶邑産の可能性が強いとされている。南九州における須恵器窯の出現が五世紀までさかのぼる可能性は少ない。その場合、これらの地域性の強い埴輪がどこで焼かれたのかという問題は、色々の論点を含んでおり、重要な問題である。同時に、宮崎県では西都原第百六十九号墳、同百七十七号墳、同百七十一号墳、女狭穂塚古墳の埴輪がⅢ期、下北方第一号墳の埴輪がⅤ期とされており、その間を埋めるものとしての重要性をも併せ

持っている。

六、南九州における前方後円墳の伝播とその背景

畿内型古墳文化の九州への伝播は、昭和四十年代初めには『日本の考古学Ⅳ』^(注10)に記されているように、四世紀代に福岡県石塚山古墳、大分県赤塚古墳などの豊前地域に上陸し、五世紀代になってほぼ九州全域におよんだと考えられていた。ところが、それから二十年近くたった今日、発掘調査の急増に伴う資料の蓄積は、基本的には変わっていないものの、若干様相を異にしている。すなわち、福岡県津古掛古墳や宮崎県下屋敷一号墳などの調査によって、その年代がさかのぼり、同時に起源論まで変わろうとしているのである。津古掛古墳は墳丘から出土した土器の年代から三世紀代の前方後円墳とされ、奈良県纏向石塚古墳などと同時期の最古の古墳とし、伴出した鶏形土器の変遷からこれを発生源とする考えもある。いっぽう、東海岸で最古とされる新富町下屋敷一号墳^(注11)は出土した土器から四世紀代前半の前方後円墳と考えられており、南九州へも相当早い時期に畿内型古墳が伝播したことを示している。

こうした現状を踏まえ、横瀬古墳の性格を探るために畿内型古墳の変遷を主として前方後円墳から追ってみようと思う。

現在のところ、県内でもっとも古い高塚古墳は飯盛山古墳であるといわれている。飯盛山古墳は昭和三十八年に国民宿舎建設によって、その殆んどが破壊されており、現在その詳細な分析は全くできない。飯盛山古墳をもっとも早く紹介したのは嶋戸貞良である。氏は昭和十一年四月十四日付の鹿児島新聞に、「志布志町夏井の古墳に就いて」という題で、その概要をまとめている。それによると、すでに旧藩時代のみはらし茶

屋や公園化で後円頂は削平されており、石室も盗掘されているようだとし、全長四十間、後円高三間でも多くの円石が点在しているという。上村俊雄氏は国民宿舎ダグリ荘の工事測量図から規模を墳長八十m、前方長四十三m、後円高四・五mと割り出している。その墳形については嶋戸は前方後円墳とし、その後も前方後円墳とされているが、前方後円墳の可能性もないことはない。ところで、その年代について上村氏は五世紀中頃としている。壺形埴輪の集積をし、その位置づけを試みた森山栄一氏は畿内での年代が四世紀後半なのに対し、九州での初見は五世紀初頭であり、飯盛山古墳のものをもっとも退化しているので五世紀中葉であるとしている^(注12)。森山氏の年代観は上村氏のものを用いているので、飯盛山古墳の年代を五世紀中葉としているのであるが、他の出土例からして、四世紀までさかのぼることはあり得ないにしても五世紀前半あるいは初頭までさかのぼる可能性はあると思われる。

飯盛山古墳の立地は初期における畿内勢力の南九州への進出を物語る位置を示している。すなわち、県内随一の穀倉地帯である肝属平野を視野に収める位置である。まず、この位置に拠点を定めて、その進出の糸口をつかもうとしたらしい。宮崎県南部でも速日峰古墳・油津古墳・伊比井古墳などいずれも古式と思われる古墳が海に面する丘陵上に存在するのは、それが偶然の結果でなく未知の世界に飛び込む時に生じる必然的な結果であろう。この時期の古墳として県内では串良町上大塚原古墳群が立地上、可能性がある^(注13)。この古墳群は円墳ばかり三基から成っているが、いずれも肝属川周辺に広がる平野を眼下にした尾根端部に造られている。やや内陸部にはいつていることから飯盛山古墳より若干時期が

遅れるのかもしれない。

ところで、この時期の墓としてはこの程度のものしかないが、土器等からはどの程度追えるのだろうか。飯盛山古墳の造られた頃か、それ以前に、国分平野にも進攻の鋒先が向けられていたことが国分市城山山頂遺跡^(注1)で多量に出土した布留式土器からうかがい知れる。城山山頂遺跡は、のちの七二〇年から翌年にかけて起こった隼人の乱で、隼人軍の最後のとりでとなった曾於^{そお}の石城^{いしき}の跡であるが、皮肉にもそれより四世紀ほど前には対熊襲の基地として使われた可能性がある。自然の要害に囲まれた地は畿内勢力にとつて守りやすい場であつたらう。しかし、この周辺では高塚の古墳は造られず、現在のところ、このような畿内系土師器を多量に出土する遺跡も他にないことから、その勢力がどうなったのか詳細は不明である。この四世紀から五世紀前半頃が畿内勢力の大隅地方攻略の第Ⅰ期であろう。

次の第Ⅱ期ともいえる五世紀中頃、これがここで紹介した横瀬古墳群などの造られた時期で、当県の古墳文化を考える上に重要な時期である。古墳時代の様子を記録した書として『古事記』・『日本書紀』があるが、これには熊襲征討説話が集中的に書かれている時期がある。周知のように『古事記』・『日本書紀』は『帝記』や『旧辞』などを素材として八世紀はじめに書かれたもので、その実在性については否定的な面も多い。特に古ければ古いほど、作偽的な面が多くなり、現在では神武天皇から十三代成務天皇までは実在が否定されている。この熊襲征討説話が集中的に出てくるのも、否定されている十二代景行天皇の時期である。これを簡単に紹介すると、景行天皇十二年十二月に襲國^{あつか}の厚鹿文^{あしか}・逆

鹿文^か(熊襲のかしら)を退治し、翌十三年の五月にはことごとく襲國を平定した。そののち二十七年八月には再びクマソがそむいたので、十月に日本武尊^{やまとたけのみこと}(景行天皇の子供)を派遣し、十二月に川上梟師^{かみね}を討った。ざっとこういう話であるが、景行天皇の死亡年令が百四十一才(十三代までは百才を越えるのが殆んどである)であるなど、その実在が否定されている現在、この説話の真实性も疑わしいのであるが、その後の記事を見ると必ずしも作り話ばかりだとはいえない。さらに『古事記』・『日本書紀』は応神天皇(十五代)・仁徳天皇(十六代)の頃にも日向との深いつながりを紹介しており、この頃に南九州との関係が密接となったことを示している。そして仁徳天皇の子にあたる履中天皇(十七代)の記事の中には仁徳天皇の子、住吉仲皇子に刺領巾^{さしりん}(古事記では曾婆加里^{そはかり}となつている)という近習の隼人がいたことが記されており、ここに初めて『隼人』の名が出てくる。と同時に、以後、熊襲の名は『古事記』・『日本書紀』ともに出てくることはない。さらに清寧天皇(二十二代)の記事には雄略天皇(二十一代、清寧天皇の父、仁徳天皇の孫)の陵で、隼人が昼夜食事もとらず哀号し、七日目に死んだと記されている。ともに、隼人が天皇の周辺に仕えていたということを示している。

これがいづ頃の事かという点については、『宋書』などに登場する倭の五王(讚・珍・濟・興・武)の年代が参考となる。この五人を誰に比定するかは多少の異説があるが、仁徳・反正(十八代)・允恭(十九代)・安康(二十代)・雄略の五天皇に比定する説が有力である。その遺使は仁徳の四一三年から雄略の四七八年までとされているから、文献からみると四世紀頃から熊襲征討が始まり、五世紀になると隼人が天皇

の近習として、そばに仕えていたことがわかる。こうしてみると、この五世紀中葉に次々と造られた高塚古墳成立の背景が、その年代に若干のずれがあるものの理解できる気もする。

ここで考古資料から、もう少しこのあたりの動向を探ってみよう。大隅半島には約四百の高塚古墳があり、その中の一部は石棺等の露出したものもあるが、発掘調査のされたものは殆んどなく、その内容は殆んど不明といわざるを得ない。また、内部主体からの出土遺物、墳丘の供献土器なども殆んどなく、墳丘測量のされたものも少ない。こうした現状の中で、いくら何でも内容をうかがうことのできる資料からその変遷を考えてみたい。

まず、県内でもっとも長い前方後円墳である唐仁大塚古墳であるが、この古墳は墳形が特異である。まず、前方部と後円部の高さが極端に違うことである。現在でも六・七m(九mと二・三m)の違いがあるが、後円部はすでに竪穴式石室の天井石が露出しており、第二主体部の組合わせ式箱形石棺も棺身が露出していることから、築造当時の比高は八m近くにもなることが予測できる。このような後円部に比して前方部の低い(二分の一しかない)古墳は、他に神領十一号墳、塚ノ下五号墳、塚崎十号墳、同十六号墳、同三十九号墳などがあり、このうち塚崎十六号墳(四mと一m)と塚崎三十九号墳(九mと二・九m)の両墳は極端な例である。次に挙げられる特異な点は、周濠が前方部までまわらず、後円部だけでおわっていることである。これに近い形の古墳として西都原古墳群内にある男狭穂塚古墳がある。男狭穂塚もこの変な形から、①女狭穂塚築造の際に前方部が破壊されたとする説、②前方部の短い帆立貝

形前方後円墳だとする説、③未完成古墳とする説、④円墳とする説などがあり、最近では応神天皇の陵に比定されている誉田山古墳の二分の一に企画されているという指摘もある。ところで、唐仁大塚古墳も①円墳であるとする説、②周濠は前方後円形を呈し、前方部分が埋もっているという説、③周濠は後円部だけにあるという説などがある。嶋戸貞良の計測値は③の立場をとり、濠の幅をあわせた全長を百八十五mとしているが、この計測点では前方部端を神社境内の端までとつてある。しかし、現在みる所では境内の駐車場は低くなつており、墳丘端は秋葉社や稲荷社のある付近が端部のようにみえる。そうすれば、墳長は百三十七m、全長は百六十七m位になるかと思える。②の立場をとつた時に全長が百八十五m位になろう。

唐仁大塚古墳の内部主体は、現在、神社神殿の地下になつて天井部をセメントで固めてあるために調べることはできないが、古い記録によつて内容をうかがうことができる。それによると竪穴式石室の中に舟形石棺のあることが記され、その北側に横切板鋌留短甲が置かれていたとされている。この古墳は短甲の形態から五世紀中葉のものと思われるが、前方部の形や高さ、石棺の形態などから、横瀬古墳に比べて一段階古く位置づけられよう。

大崎町神領六号墳(天子ヶ丘古墳)は墳長四十三・三mの小規模前方後円墳で、現在は宅地化のため破壊され残っていない。破壊に先立って発掘調査がされ、後円部東北より組合わせ箱式石棺のあったことが確認されている。ここでは鏡・鉄剣・鉄刀・貝輪などが出土しているが、特に鏡の出土により年代が推測できる。諏訪昭千代氏の報告によれば、鏡

は二面出土している。一面は「見日之光長母相忘」という銘文のある日光鏡で、これは宋代の踏返しである。あと一面は仿製の変形獸帯鏡で、石棺内の北壁寄りであったとされる。日光鏡が宋代の踏返しであることから、その年代は四二〇年よりあとになるが、伝播等から考えて五世紀中葉として、横瀬古墳、唐仁大塚古墳よりは新しくなるだろうと考えている。

昭和六十年に発掘調査された串良町岡崎四号墳^(注2)は、墳丘の調査された数少ない古墳のひとつで、同時に供献土器が出土してその年代を確定できた貴重な古墳である。古墳は幅四・五m、深さ〇・五mの濠を巡らす墳径二十mの円墳で、木棺直葬であった。主体部直上に土師器の壺形土器一、高坏形土器九と、須恵器の甕あるいは壺一があり、その年代は五世紀中葉としている。

この他に、この頃の畿内とのつながりを示す資料として、畿内産初期須恵器の出土がある。その広がりには原下全域に及び、現在十二か所で報告されており、志布志湾では横瀬古墳、岡崎四号墳の他に、串良町上小原古墳群、高山町後田、同軍並木でも出土している。また、高山町塚崎古墳群のある塚崎台地では集落遺跡の大戸原遺跡から岡崎四号墳で出土したものと似た畿内型の高坏形土器が出土している^(注3)。

このように、五世紀中頃は志布志湾沿岸の海岸寄りの地に次々と高塚古墳が築造された時期である。と同時に、この頃に高塚古墳とともに、この地では地下式横穴と呼ばれている南九州特有の墓が造られる。この墓は高塚古墳の中にも広まるが、その中で、この両者は共存する所と、共存しない所という異なる社会圏をつくっている。後者は高塚古墳だけ

の所と、地下式横穴だけの所とに分かれるから、大きく三圏に分かれることになる。まず、共存する所として大崎町飯隈古墳群、同神領古墳群、串良町上小原古墳群、同大塚原古墳群、同岡崎古墳群、高山町塚崎古墳群、同上原古墳群などがある。これらの中には前方後円墳を含んでいる古墳群も少なくない。次に高塚古墳のみの所は志布志町小古墳群、有明町大塚古墳群、串良町尼が塚古墳群、東串良町唐仁古墳群、高山町辺塚古墳群などがある。いっぽう、地下式横穴のみの所は高山町横間地下式横穴群、吾平町天神原地下式横穴群、同宮ノ上地下式横穴群などがあり、これらはやや内陸部にはいつているという共通要素をもっている。

高塚古墳を畿内系の人々の墓、地下式横穴を在地の人々の墓と、単純に分けることができるかといえ、内部主体等のはっきりしたものが少ない現在、確認できないが、円墳の中にも地下式横穴と同じく軽石製箱形石棺を内部主体としているものが少なからず存在することから推測すれば、その区別は困難ではないかと思える。その中で唐仁古墳群は高塚古墳ばかり百三十九基という県内最大の古墳群であるが、その立地地形が微高地という点でも他の古墳群とはいくらか趣きを異にしている。前方後円墳五基は規模、形態などそれぞれ違っているが、前方部はほぼ同じ方向を向いており、年代の違いはあるにしても、これらが互いに深いつながりをもって築造されたことが予測できる。

五世紀後半までに、ほぼ定着した観のある高塚古墳の分布域は、やがて六世紀になると種子島にまで飛ぶ。西之表市種子島実業高校の敷地内にある今平古墳群は横穴式石室を内部主体にもつ、少なくとも五基から成る古墳群であり、立地は志布志湾岸と同じく台地縁辺にある^(注4)。詳細は

不明であるが、ここで注目されるのは内部主体である。志布志湾岸では今のところ横穴式石室をもつ古墳が皆無で、その伝播が大隅経由でなく日向直行型であることが考えられる。このことは、西之表市横峯遺跡で確認された円形周溝墓（注6）についてもいえる。

このように志布志湾沿岸では五世紀中頃から畿内勢力が深く浸透しており、天皇の近習に仕えるほど身近な協力関係のできた状況を高塚古墳の分布からうかがうことができる。

七、おわりに

以上、横瀬古墳出土の遺物を紹介し、その特殊性を提起するとともに志布志湾沿岸における高塚古墳の伝播時期とその背景について考えてきた。おわりに、横瀬古墳の被葬者の性格について述べ、むすびとしたい。

横瀬古墳は繰り返し記してきたように、きわめて畿内の古墳で、埴輪に若干の地域性がみられるものの、出土遺物など全てが他地域と同じような様相を呈している。こうしたことから考えて、この被葬者は畿内からこちらへ派遣された豪族であることは間違いないであろう。そして、この五世紀中頃を境にして志布志湾沿岸は完全に中央の勢力に組み入れられ、文献上でも征討説話がみられなくなるように、中央から征討軍の来ることはなくなったのであろう。すでに、五世紀後半には地方豪族でありながら、中央とのパイプをもった者がいたことが、鹿屋市祓川地下式横穴から出土した横短板鋌留短甲・衡角付冑などの出土から推測できる。その意味において横瀬古墳の被葬者は、五世紀はじめ頃から始まった南九州制圧の仕上げに来て、見事にそれに成功した人だったのではなからうか。それ故に、長さこそ一段階古いと思われる唐仁大塚古墳にや

や及ばないものの、容積から見ると県下最大の古墳であり、南九州でも西都原古墳群の男狭穂塚・女狭穂塚と並ぶほどの巨大古墳なのである。墳丘測量図がないため、その形態を他の古墳と比較することが出来なかったが、その形態は畿内のどれかに似ている可能性があり、今後に残された課題といえよう。

稿をとじるにあたり、この小論を書くきっかけを与えてくれた横瀬古墳の埴輪片等を大事に収集保管された寺師見国先生の御冥福をお祈りするとともに、その発表を許された御遺族の皆様には厚くお礼を申し上げます。また、前方後円墳一覽表の作成や、一部、埴輪の実測をお手伝いいただいた当館の資料調査員松山友子嬢にも感謝したい。

（昭和六十二年二月二日稿了）

注1、横瀬古墳は横瀬大塚古墳、大塚山古墳、舟塚古墳とも呼ばれているが、こ

こでは鹿児島県市町村別遺跡地名表に記載されている名称にしたがった。

注2、これは第9図51に似ており、右端が左端になると思われる。

注3、中村耕治他「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」〔鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書〕（29） 鹿児島県教委 昭和五十九年

注4、高さは昭和六十一年十二月一日に宮原景信氏とともに測定した。

注5、大崎町史によると、名勝誌には「大塚大明神の社あり」と記してあり、土地の人々も大塚神社と呼んでいるが、町役場台帳では加茂神社となっており、内務省神社局編纂の神武天皇御記謹解には「加茂神社、祭神神武天皇」とあるという。

注6、宮崎県関係資料については、次の書を主として参考にした。

石川恒太郎『宮崎県の考古学』吉川弘文館 昭和四十三年

鈴木重治『日本の古代遺跡25宮崎』保育社 昭和六十年

注7、ここでは地理学上の南九州とは異なり、地下式横穴との共存を見出し得る小丸川周辺より南、すなわち隼人勢力の地を指している。

注8、川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第六十四巻第二号 日本考古学会 昭和五十三年

注9、三辻利一他「5、6世紀の大坂陶器産須恵器の分布(第1報)」『考古学と自然科学』第十七号 日本文化財科学会 昭和五十九年

注10、小田富士雄「古墳文化の地域的特色—九州—」『日本の考古学』IV 河出書房 昭和四十一年

注11、新富町教育委員会「新富町・下屋敷1号墳発掘調査中間報告」『宮崎考古』第9号 宮崎県考古学会 昭和五十九年

注12、上村俊雄「飯盛山古墳とその周辺」『九州考古学』39・40号 九州考古学会 昭和四十五年

注13、森山栄一「長目塚古墳の埴輪」『肥後考古』第4号 肥後考古学会 昭和五十八年

注14、出口浩他「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」(鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書)(6) 鹿児島県教委 昭和五十二年

注15、平田信芳他「城山山頂遺跡」(国分市埋蔵文化財調査報告書)(2) 国分市教委 昭和六十年

注16、文献資料については次の書を主として参考にした。
中村明蔵「熊襲と隼人」評論社 昭和四十八年

同「熊襲・隼人の社会史研究」名著出版 昭和六十年

注17、上村俊雄「隼人の考古学」(『考古学ライブラリー』30) ニューサイエンス社 昭和五十九年

注18、小田富士雄「古墳時代」『図説発掘が語る日本史』6 新人物往来社 昭和六十一年

注19、網平善教「畿内における前方後円墳の築造についての二・三の問題」『宮崎の古墳文化』宮崎市教委 昭和六十一年

注20、嶋戸貞良「肝属平野の古代文化」 昭和六年

注21、山崎五十磨「鹿児島縣の古墳と當時の文化」鹿児島県學園聖蹟調査会 昭

和十八年

注22、河口貞徳「鹿児島県における緊急発掘とその問題点」『考古学ジャーナル』第52号 ニューサイエンス社 昭和四十六年

注23、諏訪昭千代「大崎町出土の古鏡とその年代について」『鹿児島考古』第5号 鹿児島県考古学会 昭和四十六年

注24、中村耕治他「岡崎4号墳・1号地下式横穴」(中良町埋蔵文化財発掘調査報告書)(1) 中良町教委 昭和六十一年

注25、注24と同じ

注26、出口浩・繁呂正幸「花牟礼(大戸原)遺跡」(高山町埋蔵文化財発掘調査報告書)(1) 高山町教委 昭和五十六年

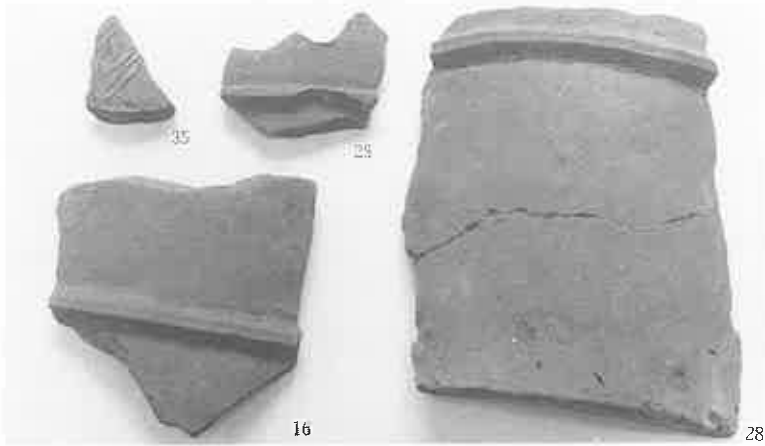
注27、この古墳群は、すでに三友国五郎、河口貞徳・国分直一「薩南諸島の考古学的調査」『考古学雑誌』第39巻第1号(昭和二十八年)に「古墳の石室構造の遺構でないか」と見られる巨石群が発見された」と記されたこともあるが、古墳として確定されていなかった。筆者は昨年十月に同校事務長上

土橋兵作氏ら職員の方々の案内で調査をし、すでに封土を失ない天井石もない石室や、竹やぶの中にある露出した石室、台地端に置かれた巨大な天井石等を見せていただいた。また、すでに一基は削平され、一基は埋れているとの話を聞いた。

注28、周溝から上能野式土器が出ており、六世紀頃と思われる。

中村耕治「横峯遺跡の調査」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(5) 鹿児島県教委 昭和五十二年

図版一 横瀬古墳・円筒埴輪





27



27



26



27



34

30

